

令和6年度福岡市埋蔵文化財センター考古学講座

三種の神器と北部九州

- 第1回 令和6年6月15日(土) 愛媛大学 吉田 広 氏
「青銅製武器の行方
—三種の神器への連なりを問う—」
- 第2回 令和6年9月28日(土) 奈良文化財研究所 谷澤 亜里 氏
「「定形勾玉」の展開と北部九州」
- 第3回 令和6年12月7日(土) 京都橋大学 南 健太郎 氏
「北部九州の銅鏡と弥生社会」

令和6年度福岡市埋蔵文化財センター考古学講座

「三種の神器と北部九州」第2回

奈良文化財研究所 谷澤 亜里 先生

「「定形勾玉」の展開と北部九州」

令和6年9月28日(土) 13:30~15:00

定員 200人(先着順)

福岡市埋蔵文化財センター
ホームページ



「福岡市の文化財」
Facebook



※定員や申込方法などが変更となる場合は、
埋蔵文化財センターホームページでお知らせします。

主催・問い合わせ先

福岡市埋蔵文化財センター

〒812-0881 福岡市博多区井相田 2-1-94

TEL: 092-571-2921 FAX: 092-571-2825

電子メール: malbun-c.EPB@city.fukuoka.lg.jp

※会場は福岡市博物館になりますので、ご注意ください。

「定形勾玉」の展開と北部九州

谷澤亜里（奈良文化財研究所）

はじめに

吉武高木遺跡の3号木棺墓から出土した多鈕細文鏡、細形銅剣をはじめとする武器形青銅器、翡翠製勾玉と碧玉製管玉からなる玉類は、「鏡・剣・玉」にあたるとして、発掘調査当時に話題を呼んだ。今回の講座では、このうちの「玉」に焦点をあてる。

「玉」に関しては、講座のシリーズテーマである「三種の神器」との関連性について、考古学的な話をする前に確認しておくべきことがいくつかある。そのため、まずは先行研究を参考にしながら「三種の神器」と「八尺瓊勾玉」に関連する論点を整理する。そのうえで、玉のなかでも特に勾玉をとりあげて弥生時代から古墳時代前期にかけての変遷をたどり、そのなかで吉武高木遺跡出土品が占める位置を考えてみたい。

I 「三種の神器」と「八尺瓊勾玉」

(1) 王権のレガリアと「三種の神器」

「三種の神器」を辞書で引くと、「歴代の天皇が皇位のしるしとして受け継いだという三つの宝物。八咫鏡・天叢雲剣（草薙剣）・八尺瓊勾玉。」（小学館デジタル大辞泉）とある。令和のお代替わりの際に、「剣璽等承継の儀」がおこなわれたことは記憶に新しい。

では、古代の天皇の即位ではどうだったのか。文献史学における研究成果を参考に概観してみたい。奈良時代の様相をみると、養老律令では、神祇令踐祚条で、即位式において中臣氏が「天神之寿詞」を奏し、忌部氏が「神璽之鏡剣」を献上することが規定されている。また、『日本書紀』持統天皇四年（690）正月戊寅朔日条にも、中臣大嶋が「天神寿詞」を奏上し、忌部色夫知が「神璽鏡剣」を奉上したとする記述があり、即位にともなう「鏡剣」の献上は7世紀後半までは遡るとみられる。

『書紀』において、持統よりも前の天皇では、允恭以降、即位にあたって群臣が「璽符」、「璽」、「璽印」などを献上する記事がみえる（表1）。このことから、レガリアの献上儀礼は大化前代に遡るが、これは本来、群臣による新大王の推戴に伴う儀礼であったと考えられている（岡田1992、吉村1996、大津1999、熊谷2002）。

今回の講座テーマとの関連では、献上されたことがわかる明確な器物は「鏡剣」で、玉についての記述はみえないことが注目される。神器が、三種→二種→三種と変遷したとする説や（直木 1968）、即位式で献上はされないながら玉も継承されたとみる説（黛 1978）もあるが、実際のところはよくわからないといえよう。仮に勾玉がレガリアに近い扱いを受けていたとしても、鏡や剣とは位置づけを異にしていたことは確実である。現在の私たちが思い描く「三種の神器」のイメージは中世に形成された部分が大きいようだ（山本 2003 など）。

（2）『古事記』・『日本書紀』にみえる「三種宝物」

『古事記』・『日本書紀』で鏡・剣・玉のセットが出てくる有名な場面として、天孫降臨神話がある。『古事記』ではアマテラスがニニギを地上へ降らせる際に八尺勾璽・鏡・草那藝劔を与えている。『書紀』では本文にはこの3点セットに言及はないが、異伝のうちの一つ（一書第一）に、八坂瓊曲玉・八咫鏡・草薙劔の「三種宝物」を与える記述がある。

これに加えて『書紀』で注目されるのは、景行紀と仲哀紀で、天皇が筑紫に向かった際、在地首長が船に賢木を立て、その枝に鏡・剣・玉を掛けて天皇を迎える場面である。どちらも実在の天皇とは考えがたいが、これらの場面は在地首長が天皇に祭祀権を差し出す服属儀礼の描写と考えられている（大津 2010）。賢木に鏡と玉を掛ける描写は、天の岩屋戸においてアマテラスの出現を祈る場面にもある。『書紀』において、これらのアイテムが古い時期の普遍的な祭具として描かれていることがわかる。

なお、玉に関しては、アマテラスとスサノオがウケヒをする際、アマテラスがみずらと腕に巻いていた「八尺璽勾玉之五百津之美須麻流之珠」（『古事記』）を用いる記述から、「八尺璽勾玉」が装身具としても認識されていることがわかる。

（3）「八尺瓊勾玉」のイメージ

「八尺瓊勾玉」は、「八尺璽勾玉之五百津之美須麻流之珠」などと記述される箇所があることから、勾玉単体ではなく、多数が綴られた状態とみるべきとの指摘がある（喜田 1933）。この説では、「八尺」は綴られた連の長さを表現しているとされる。

ただし、単に「八尺瓊勾玉」などとだけ書かれる際は勾玉単体を指すとみる見解もある。この場合、「八尺」は勾玉のサイズが大きいことを示す表現として理解されている（水野 1969）。また、奈良時代に寺院で鎮壇具や荘厳具に用いられた勾玉は、本来の玉のセット関係から遊離した状態であることから、「八尺瓊勾玉」は勾玉単体のイメージでも捉えうるという指摘もある（森 1993）。

II 考古学からみた弥生時代の勾玉と北部九州

(1) 縄文時代～弥生時代前期：吉武高木以前

勾玉は縄文時代から用いられているが、使用が特に増えるのは縄文時代後晩期からで、東北・北海道では新潟県糸魚川産の翡翠を用いた多様な形態の勾玉がみられる。いっぽう、九州においては縄文時代後期末～晩期前葉に「クロム白雲母」と呼ばれる濃緑色の石材を用いた「コ」字形の勾玉が流行している（図3）（大坪2019）。

弥生時代に入ると勾玉の使用はいったん低調となったようで、弥生早期～前期の勾玉の出土例は多くなく、事例によって素材や形態が様々である。また、韓半島から持ち込まれたと考えられる円筒形の管玉（「半島系」管玉）（大賀2011）を伴う例もある。韓半島で管玉とセットになる天河石製の勾玉も、散発的に出土がみられる。

(2) 弥生中期初頭～中頃：吉武高木遺跡の玉と「北部九州系」勾玉

吉武遺跡群では弥生時代墓地が前期後半～後期前半にかけて営まれ、その埋葬数は約1300基に及ぶ。このなかに、いわゆる「甕棺ロード」から離れて、副葬品を多数もつ中期初頭の埋葬が集中する一画（高木地区）がある（図4・5）（福岡市教委1996、常松2006）。この吉武高木の厚葬墓は「最古の王墓」とも呼ばれるが、その実態としては、複数の集団から選抜された部族社会のリーダーたちの墓地とみる見解もある（田中2000など）。

玉類は、7基の埋葬から出土しており、出土状況からは頸～胸飾や腕飾に用いられたと考えられる。武器形青銅器をもつ埋葬8基のうち4基が玉をもっており、多数の玉で構成される装飾品がリーダー層の権威の象徴として用いられたことがうかがえる。なお、青銅器と管玉を多数連ねた装身具をセットで副葬する習俗は、韓半島南部に由来する。

吉武高木遺跡の玉は、管玉はすべて半島系で、勾玉は翡翠製の大型品を含むことが特徴である。3号木棺墓からは「獣形勾玉」、2号木棺墓からは「緒締形勾玉」などとよばれる勾玉が出土している（図6-1・2）。このような形態は縄文時代の勾玉に祖型を求めうるが（森1980）、弥生時代早～前期の空白期をはさんで吉武高木の時期に突然出現するようだ（図3）。以降は、佐賀県宇木汲田遺跡（唐津湾周辺遺跡調査委員会1982）や中原遺跡（佐賀県教委2011）などでも多数みられる。その形態は多様だが（図6）、根底には「鉤」と「結縛」のイメージがあるとみてよい（木下2000）。なかには、円形の頭部をもち滑らかな曲線で構成され、頭部に3～4条の刻線をもついわゆる「定形丁字頭勾玉」（図6-8・9）（木下1987）もみられる。ただし、この段階では、他の形態のものとは比べて特別な扱われ方をされていたわけではなさそうだ（谷澤2023）。

このような翡翠製勾玉は弥生時代中期には北部九州に分布が集中し、「北部九州系」の勾玉と呼ばれている（大賀 2011）。どこで作られていたかは現状では明確でないが、中期前半～中頃は唐津平野に出土が集中することを重視する見解がある（田平 2008）。

なお、弥生時代前期末以降、半島系管玉を模倣して列島内で緑色凝灰岩や碧玉で管玉生産がおこなわれるようになり、日本海側を中心に玉作遺跡が分布するようになる（大賀 2011）。このうち、北陸地域では、糸魚川産の翡翠原石を素材とする勾玉の製作も行われた。製作遺跡から出土する未成品をみると、北陸地域で製作された翡翠製勾玉はいずれも小型で、「半瑛形」とよばれるシンプルな形態である（図7）（浅野 2003）。弥生中期の本州以東では、このような「北陸系」の勾玉が主体となるが、北部九州へも流通していた。

（3）弥生中期後葉：須玖岡本遺跡・三雲南小路遺跡と「定形勾玉」

弥生時代中期後葉の北部九州では前漢鏡をはじめとする中国系の遺物を副葬する墓が現れ、その保有のありかたに階層性がみられる（下條 1991、高倉 1995 など）（図8）。このなかで、最上位にあたる須玖岡本遺跡 D 地点と三雲南小路遺跡の甕棺墓は、ガラス製もしくは翡翠製の勾玉を伴う（図9）。須玖岡本 D 地点のものはガラス製で、全長 5 cm を超える大型の「定形勾玉」である（中山 1928）。三雲南小路では、1 号甕棺墓（副葬鏡に大型品を含み武器形青銅器を伴う）からはガラス製勾玉 3 点、2 号甕棺墓（副葬鏡は小型品のみ）からは翡翠製で大型の「定形勾玉」（全長 4.5cm）と、小型のガラス製勾玉 12 点が出土している（福岡県教委 1985）。これに対し、前漢鏡を副葬する他の遺跡では、ガラス管玉はみられても勾玉の副葬はみられない。安徳台遺跡（那珂川町教委 2006）や大分県吹上遺跡（日田市教委 2006）のような前漢鏡をもたない厚葬墓では勾玉の副葬がみられるが、いずれも小型品である（図10）。「定形勾玉」の大型品が、ランクの高い副葬品として重視されていることがわかる（木下 1987）。

また、この時期からガラス製の勾玉が多数みられるようになることも注目される。ガラスは人工の素材で、熱すると柔らかくなる性質を利用して加工することができる。弥生時代後期～終末期には、須玖五反田遺跡など福岡平野を中心とする地域でガラス勾玉の鑄型がみられ（図12）、生産開始は中期後半に遡るものとみられる。当時の日本列島ではガラスそのものを生産する技術はまだなかったと考えられ、素材となるガラスは舶載品である。中期後葉の北部九州でみられるガラス製品は基本的に「中国のガラス」とされる鉛バリウムガラスで、前漢鏡などと同様に、楽浪郡を介した中国との交流が背景にある遺物といえる（小寺 2016）。

須玖岡本 D 地点甕棺墓の勾玉がガラス製なのは、後期以降の様相を考慮すると、この地域の

集団がガラスの加工技術をもっていたことと関連する可能性が高い。三雲南小路遺跡でみられる小型のガラス勾玉も須玖岡本遺跡の近辺で製作されたものであろう。この二つの遺跡については、ほぼ同格でありつつ、相互に様々な器物を贈与・交換し合うような関係が想定されており(辻田 2019)、このことはガラス勾玉からみても首肯できる。いっぽう、三雲南小路2号甕棺の大型の勾玉は翡翠製で、中期前半～中頃に翡翠製勾玉の集中する唐津地域で製作された可能性がある(谷澤 2023)。三雲南小路の勾玉の構成は、糸島地域が博多湾沿岸と西北九州沿岸部との結節点に位置することをよく示しているといえる。

(4) 弥生後期前半：ガラス製玉類の広域流通

中期後葉の北部九州でみられた埋葬の階層性は、弥生時代後期初頭には不明瞭となる。漢鏡の副葬例は一時的にみられなくなっており、その背景には、前漢末から後漢初頭にかけての大陸側の情勢の混乱の影響が大きいと考えられる(辻田 2019)。中期末にみられるタイプのガラス管玉やガラス璧も流入が途絶えており、同様の背景によるのだろう。また、後期初頭は列島内広域で集落動態の面期としても知られている。これに関連して、列島内の石製の玉生産も一時的に衰退したようで、後期前半にかけては石製の管玉や翡翠製の勾玉の流通量も少ない(大賀 2011)。

このような状況を経て、後期前半～中頃以降には、引き伸ばし技法で製作された輸入品のガラス小玉が多量に流通するようになる。この現象は、井原ヤリミゾ遺跡や佐賀県桜馬場遺跡の例からみて、漢鏡の副葬再開ともほぼ連動する。後期前半～中頃は、「倭奴国」(57年)や「倭国王師升」(107年)が後漢王朝に遣使を行った時期に相当し、このような対外活動に伴って、楽浪郡や半島南部を経由してガラス小玉が流入したと考えられる。

この時期、北部九州での勾玉の出土事例はあまり多くない。この時期の数少ない翡翠製勾玉が桜馬場遺跡(唐津市教委 2011)でみられるのは、唐津地域で中期に翡翠製勾玉が多いことと関連しているだろう。また、須玖岡本I地点20号甕棺墓では、全長4.9cmの大型のガラス勾玉(図13-1)が825点のガラス小玉とともに出土したが、副葬品は玉のみである(春日市教委 2024)。

くわえて、後期以降にみられる変化として、ガラス製玉類が本州以東にも広域に流通するようになる。後期前半～中頃においては、山陰から近畿北部に至る日本海側で墓への副葬が顕著で、ガラス製の勾玉を伴う埋葬もある。これらのガラス勾玉には、材質や形態からみて北部九州で製作されたとは考え難いものが多いが(図13-4・5)、鳥取県松原1号墓(鳥取市文化財団 2012)や京都府三坂神社3号墓(大宮町教委 1998)でみられる鉛バリウムガラス製で「定形勾玉」に近い形態の勾玉は、北部九州との関係を考えることもできる(図13-2・3)。

(5) 弥生後期後半～終末期：弥生墳丘墓と勾玉

後期後半になると、本州以東では「弥生墳丘墓」とよばれるような、発達した区画施設をもち格差の表示が顕著な有力者の墓が営まれるようになる。なかでも、各地域の最上位層の墓とみられる例として、岡山県楯築墳丘墓（岡山大学文明動態学研究室・考古学研究室 2021）、鳥根県西谷 3 号墓（鳥根大学考古学研究室・出雲弥生の森博物館 2015）と、これにやや遅れる終末期前半の京都府赤坂今井墳丘墓（峰山町教委 2004）が挙げられる。これらはいずれも舶載品の管玉を主体とするまとまった量の玉類を副葬しているが、その構成内容がそれぞれの遺跡で異なることから、各遺跡の被葬者がそれぞれ主体的に對外活動をおこなって獲得したものだと考えられる（大賀 2010）。

以上の 3 つの遺跡ではいずれも勾玉を副葬しており、このうち、楯築墳丘墓（図 14）と赤坂今井墳丘墓（図 16）では大型の「定形勾玉」がみられる。前者は翡翠製、後者はガラス製と素材は異なるが、形態からみてどちらも北部九州で製作された可能性が高い（大賀 2010c）。両遺跡とも、周辺より劣位にあったとみられる墳丘墓では、在地で製作された可能性のある小型のガラス勾玉や、北陸系の小型の翡翠製勾玉などが用いられていることから、これらの地域の最上位層がサイズの大きな「定形勾玉」を重視するようになったことがうかがえる。

同時期の北部九州の様相をみると、終末期前半の事例として、超大型の内行花文鏡を含む 40 面の鏡を副葬することで知られる平原 1 号墓では、ガラス製の「定形丁字頭勾玉」3 点が出土している（図 17）（前原市教委 2000）。また、翡翠製の勾玉についても、中期の段階から出土の多かった唐津地域の中原遺跡の方形周溝墓の例を挙げることができる（佐賀県教委 2012）。

以上のように、後期後半～終末期は、列島の広域で勾玉の使用が流行し、勾玉の理念形として「定形勾玉」が共有されるようになった時期といえる。ただし、この流行は特定の地域が主導したというより、有力者層のあいだで勾玉を用いた装飾品が相互に参照されることで生じたとみられる（谷澤 2020）。なお、近畿中部では、この時期に勾玉の副葬事例が少ない。終末期後半の京都府芝ヶ原古墳（城陽市教委 2014）が目立つ例として挙げられる。

(6) 古墳時代前期：翡翠製勾玉と「威信財システム」

古墳時代前期になると、勾玉の素材は翡翠に集約される。その形態は多様だが、濃緑色透明の良質の翡翠を用いる点、丁字頭をもつものが一定量を占めている点が特徴で、弥生時代に北部九州で製作された「定形丁字頭勾玉」をモデルに製作されたものだと考えられる（大賀 2012）。ただし、どこで製作がおこなわれていたのかは明瞭ではない。前期古墳から出土する翡翠製勾玉を弥生時代からの伝世品とみる見解は根強いが（小林 1959、河村 2021）、前期古墳から出土する翡

翠製勾玉には、弥生時代にはみられない形態ヴァリエーションがみられるため（図 19）、多くは古墳時代に入って製作されたものと考えられる（谷澤 2020）。

古墳時代前期の勾玉では、翡翠製で丁字頭をもつものが近畿中部を中心に分布する傾向が明瞭であり、三角縁神獸鏡をはじめとする完形鏡や、腕輪形石製品などの「威信財」と同様に、王権中枢が流通に関与していたと考えられる（大賀 2012）。副葬時のセット構成からみると、半島系を主体とする管玉と翡翠製勾玉を組み合わせた装飾品の状態で授受がおこなわれていた可能性が高い（谷澤 2020）。

このような古墳時代の「威信財」は、基本的には大量に生産され、王権中枢と各地の上位層とのあいだで交換され副葬品として消費されることが前提とされている。この点で、王権の継承に際して用いられるレガリアとは大きな隔たりをもっているといえよう（cf. 辻田 2024）。

おわりに

古墳時代中期以降も、勾玉は、素材と生産体制を変えながら副葬品として用いられ続ける。ただし、古墳時代後期（6世紀）に入ると、勾玉を含む玉類の出土は群集墳や横穴墓からの出土が多くなる。勾玉という器物の性格も変容しているものと考えられよう。『古事記』・『日本書紀』にみられる「八坂瓊曲玉」がどのような勾玉を念頭に置いたものかという問題は極めて難しく、必ずしも前期古墳の副葬品にみられるような翡翠製勾玉に限定できるわけでもないだろう。

話を吉武高木遺跡に戻すと、本遺跡の勾玉は、部族社会のリーダーたちのなかで、青銅器とともに権威の象徴として用いられたことにまず大きな意義がある。このようにして北部九州で成立した一群の勾玉は、弥生時代後期～終末期における勾玉の流行を経て、前期古墳から出土する勾玉へとつながっていくが、この過程においても、勾玉がもつ象徴性や、それを入手することの意義も変わっていったと考えるべきであろう。

文献

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1986『免ヶ平古墳発掘報告書』研究紀要 3
大賀克彦 2010「ルリを纏った貴人一連鎖なき遠距離交易と「首長」の誕生―」『小羽山墳墓群の研究』福井市立郷土歴史博物館・小羽山墳墓群研究会
大賀克彦 2011「弥生時代における玉類の生産と流通」『弥生時代（上）』講座日本の考古学 5 青木書店
大賀克彦 2012「古墳時代前期における翡翠製丁字頭勾玉の出現とその歴史的意義」『古墳時代におけるヒスイ勾玉の生産と流通過程に関する研究』富山

大学人文学部
大津 透 2001「天日嗣高御座の業と五位以上官人」『古代の天皇制』岩波書店
大津 透 2010『神話から歴史へ』天皇の歴史 01、講談社
大坪志子 2019「九州における弥生勾玉の系譜」『考古学研究』第 66 巻第 1 号
大宮町教育員会 1998『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』大宮町文化財調査報告書第 14 集
大宮町教育委員会 2001『左坂古墳（墳墓）群 G 支

- 群』大宮町文化財調査報告第20集
 大村市教育委員会 1995『富の原遺跡・小佐古石棺墓群B地点II』大村市文化財調査報告第19集
 岡田精司 1992「大王就任儀礼の原形とその展開（補訂）」『古代祭祀の史的研究』塙書房
 岡山大学文明動態学研究所・岡山大学考古学研究室 2021『楯築墳丘墓』
 春日市教育委員会 1994『須玖五反田遺跡』春日市文化財調査報告書第22集
 春日市教育委員会 2024『須玖岡本遺跡8』春日市文化財調査報告書第90集
 唐津市教育委員会 1980『柏崎松本遺跡』唐津市文化財調査報告第2集
 唐津市教育委員会 2011『桜馬場遺跡（2）』唐津市文化財調査報告書第157集
 唐津湾周辺遺跡調査委員会 1982「宇木汲田遺跡」『末盧國』六興出版
 河村好光 2021『ヒスイと碧玉の考古学』六一書房
 喜田貞吉 1933「八坂瓊之曲玉考」『歴史地理』第6巻第1号（1981『喜田貞吉著作集』第一巻 平凡社 所収）
 木下 尚子 1987「弥生定形勾玉考」『東アジアの歴史と考古』中 同朋舎出版
 木下尚子 2000「装身具と権力・男女」『女と男、家と村』古代史の論点2 小学館
 木下尚子 2013「弥生時代の管玉と勾玉」『日本海を歩き交う弥生の宝石～青谷上寺地遺跡の交流をさぐる～』鳥取県埋蔵文化財センター
 小寺智津子 2016『古代東アジアとガラスの考古学』同成社
 小林 行雄 1959『古墳の話』岩波新書
 佐賀県教育委員会 2011『中原遺跡V』佐賀県文化財調査報告書第187集
 佐賀県教育委員会 2012『中原遺跡』VI 佐賀県文化財調査報告書第193集
 島根大学法文学部考古学研究室 1992「西谷墳墓群の調査」山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学考古学研究室調査報告1
 島根大学考古学研究室・出雲弥生の森博物館 2015『西谷3号墓発掘調査報告書』島根大学考古学研究室調査報告第14集・出雲弥生の森博物館研究紀要第5集
 下條信行 1991「北部九州弥生中期の「国」家間構造と立岩遺跡」『古文化論叢 児嶋隆人先生喜寿記念論集』児嶋隆人先生喜寿記念事業会
 城陽市教育委員会 2014『芝ヶ原古墳発掘調査・整備報告書』城陽市埋蔵文化財調査報告書第68集
 高倉洋彰 1995『金印国家群の時代』青木書店
 田中良之 2000「墓地から見た親族・家族」『女と男、家と村』古代史の論点2 小学館
 谷澤亜里 2020『玉からみた古墳時代の開始と社会変革』同成社
 谷澤亜里 2023「弥生時代における「定形勾玉」の位置づけ」『文化財論叢 V：奈良文化財研究所創立70周年記念論文集』奈良文化財研究所学報第102冊
 田平徳栄 2008「九州における弥生時代ヒスイ勾玉の製作と流通について」『佐賀県立名護屋城博物館研究紀要』第14集
 丹後町教育委員会 1983『大山墳墓群』丹後町文化財調査報告第1集
 常松幹雄 2006『最古の王墓・吉武高木遺跡』シリーズ遺跡を学ぶ24、新泉社
 辻田淳一郎 2019『鏡の古代史』角川選書
 辻田淳一郎 2024「ヤマト王権の威信財とレガリア」古代王権』シリーズ古代史をひらくII 岩波書店
 鳥取市文化財団 2012『松原1号墓』
 直木孝次郎 1968「建国神話の虚構性」『歴史学研究』第335号（1990『日本神話と古代国家』講談社学術文庫 所収）
 那珂川町教育委員会 2006『安徳台遺跡群』那珂川町文化財調査報告書第67集
 中山平次郎 1928「爾後採集せる須玖岡本の甕棺遺物（一）」『考古学雑誌』第18巻第6号
 奈良県立橿原考古学研究所 1977『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35冊
 奈良県立橿原考古学研究所 2008『下池山古墳の研究』橿原考古学研究所研究成果第9冊
 日田市教育委員会 2006『吹上IV』日田市埋蔵文化財調査報告書第70集
 福岡県教育委員会 1985『三雲遺跡 南小路地区編』福岡県文化財調査報告書第69集
 福岡市教育委員会 1996『吉武遺跡群VIII』福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集
 福岡市教育委員会 1998『吉武遺跡群X』福岡市埋蔵文化財調査報告書第580集
 福岡市博物館 2015『新・奴国展』図録
 福岡市立歴史資料館 1986『早良王墓とその時代』福岡市立歴史資料館図録第11集
 黛 弘道 1978「三種の神器について」『古代史論叢』上巻、吉川弘文館
 前原市教育委員会 2000『平原遺跡』前原市文化財調査報告書第70集
 水野 祐 1969『勾玉』学生社
 峰山町教育委員会 2004『赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書』峰山町文化財調査報告第24集
 森 浩一 1993『日本神話の考古学』朝日新聞社
 森 貞次郎 1980「弥生勾玉考」『鏡山猛先生古稀記念古文化論叢』鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会
 柳田康雄 2008「弥生ガラスの考古学」九州と東アジアの考古学—九州大学考古学研究室50周年記念論文集—』上巻 九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会
 山本幸司 2003「王権とレガリア」『表徴と芸能』岩波講座天皇と王権を考える 第6巻、岩波書店
 吉村武彦 1996「古代の王位継承と群臣」『日本古代の社会と国家』岩波書店
 吉村武彦 2024「＜古代王権＞を考える」『古代王権』シリーズ古代史をひらくII 岩波書店
 吉村武彦・吉川真司・川尻秋生（編）2024『古代王権』シリーズ古代史をひらくII 岩波書店

表1 即位時におけるレガリアの献上(『書紀』記載の語句による)

	レガリア	前任の身位	備考
19	允恭 天皇の璽符	皇太子	壇場の設置 皇太子は顯宗の兄(仁賢) 応神5世孫
22	清寧 璽		
23	顯宗 天子の璽		
26	繼体 天子鏡剣の璽符		
28	宣化 劍鏡	元皇后	壇の設置, 群臣が金靱を帶す
33	推古 天皇の璽印		
34	舒明 天皇の璽印		
36	孝徳 璽綬		
40	持統 神璽の劍鏡	前皇后	

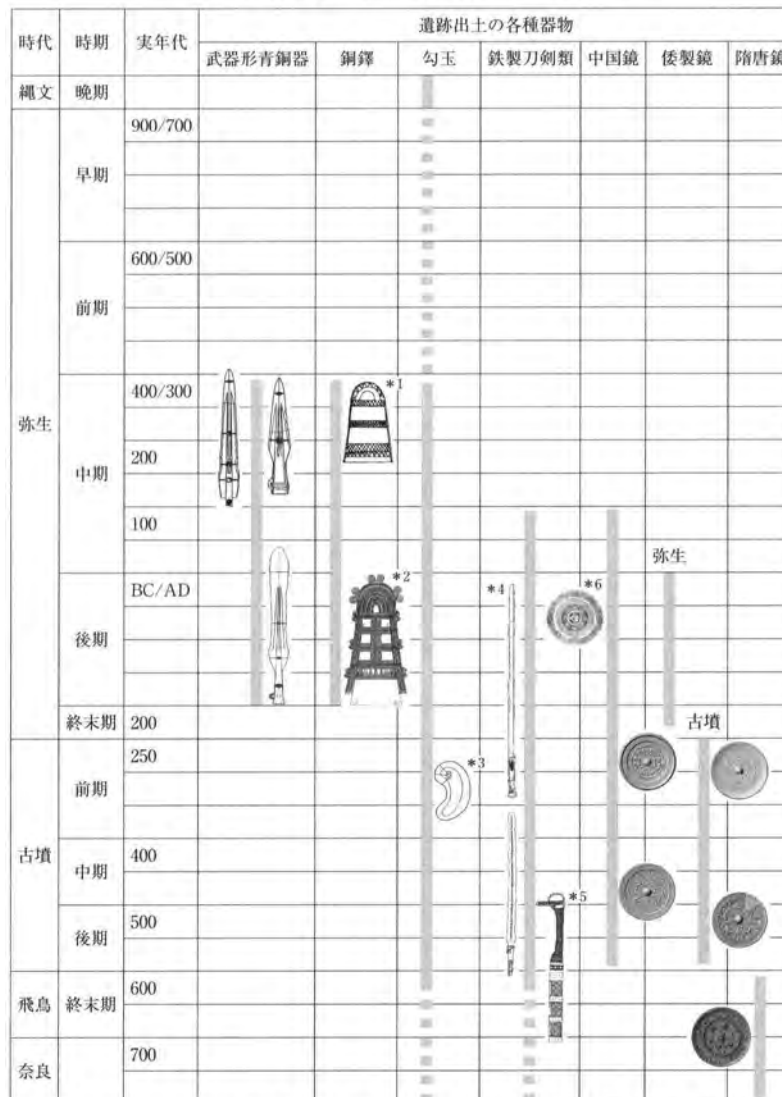
(吉村 2024)



図1 碧玉・翡翠の主な産出地

(谷澤 2019)

弥生・古墳時代の時期区分と各種器物の変遷図



※弥生時代の実年代は、特に早期から中期前半にかけていくつかの意見があるため、ここでは複数の考え方を併記する。

*1・2 佐原真「銅鐸」『世界考古学事典』平凡社、1979年、*3 古代歴史文化協議会編『玉』ハーベスト出版、2018年、*4・5 古代歴史文化協議会編『刀剣』ハーベスト出版、2022年、*6 前原市教育委員会『平原遺跡』2000年、この他の出典については本書岩永・辻田論文参照。

図2 弥生・古墳時代の時期区分と各種器物の変遷

(吉村ほか 編 2024)

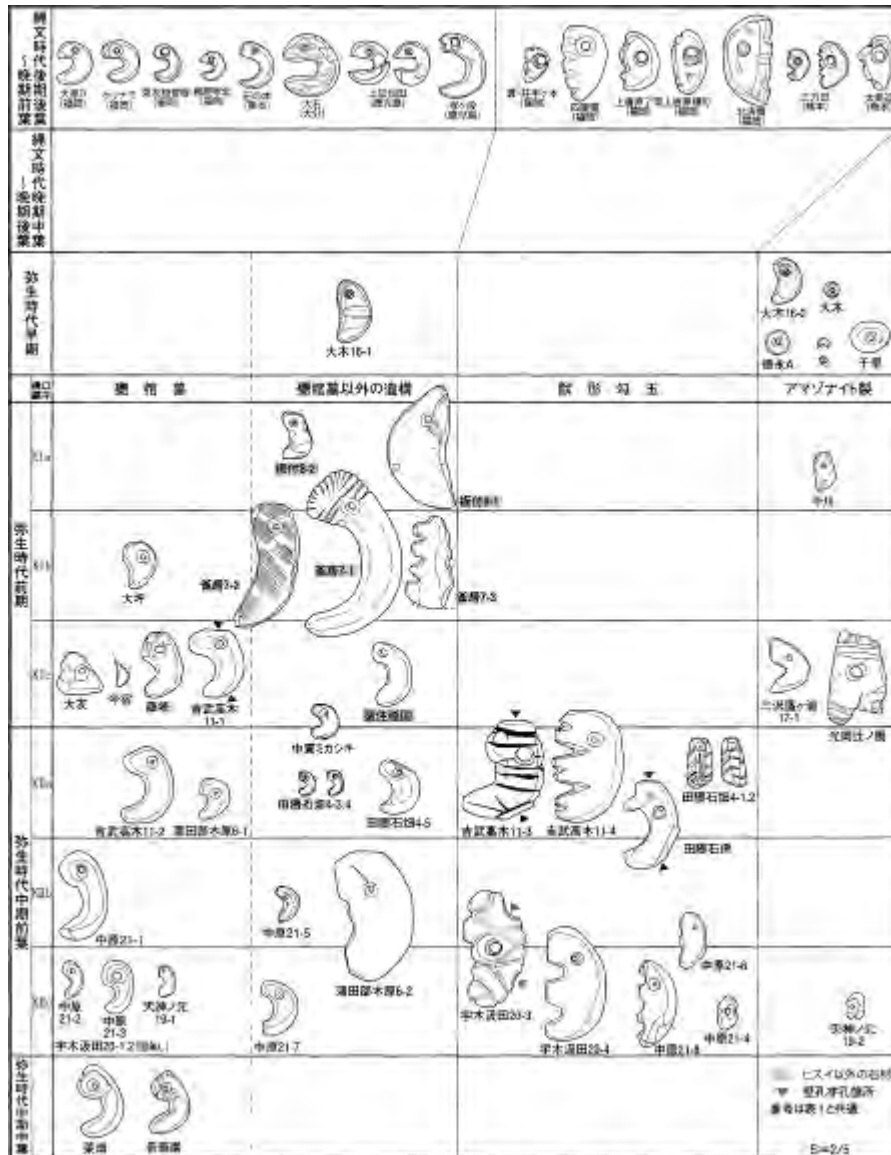


図3 九州北部における縄文時代後期後葉～弥生時代中期前葉を中心とした勾玉変遷図 (大坪 2019)

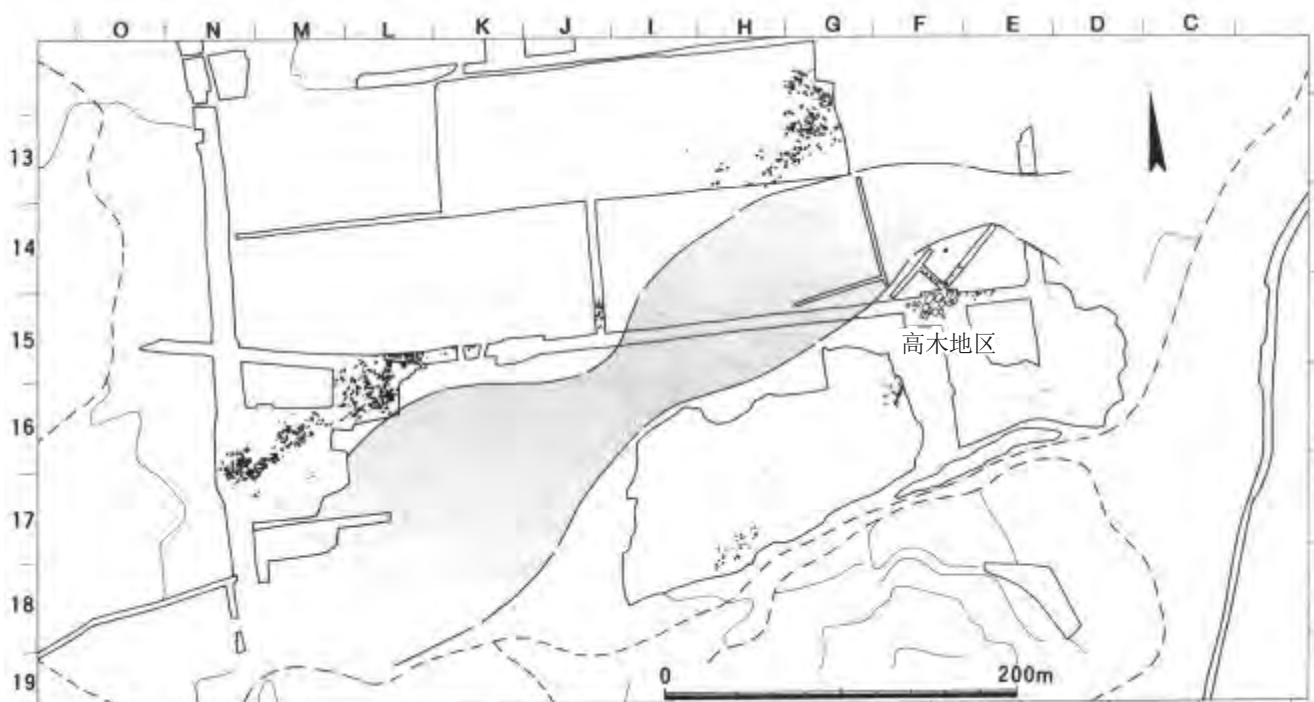


図4 「甕棺ロード」と吉武高木遺跡 (福岡市教委 1998)

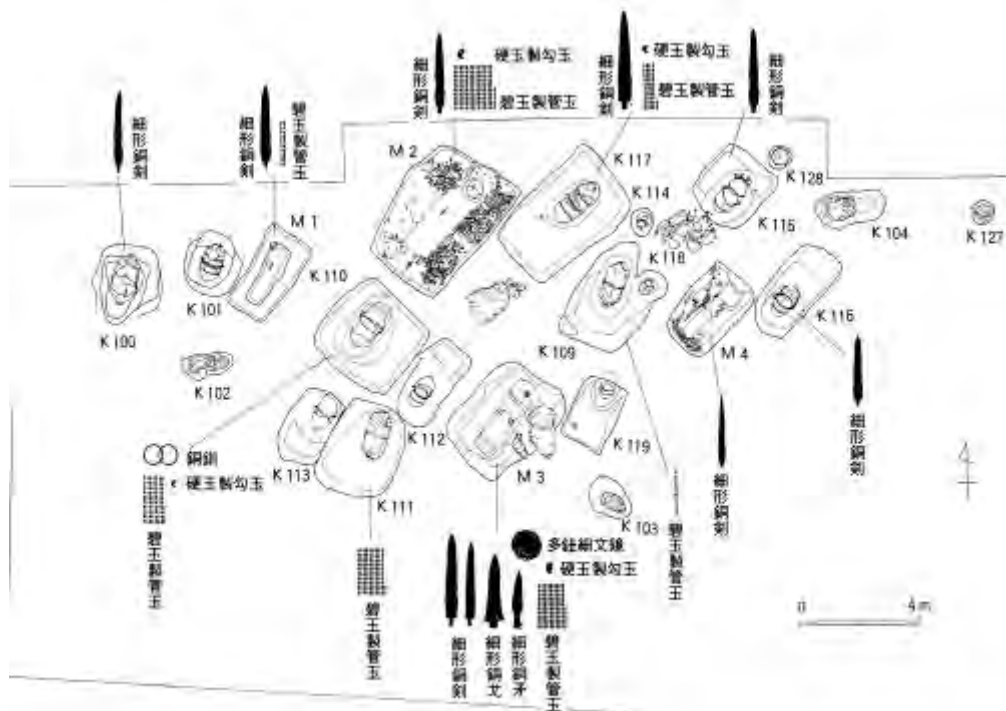
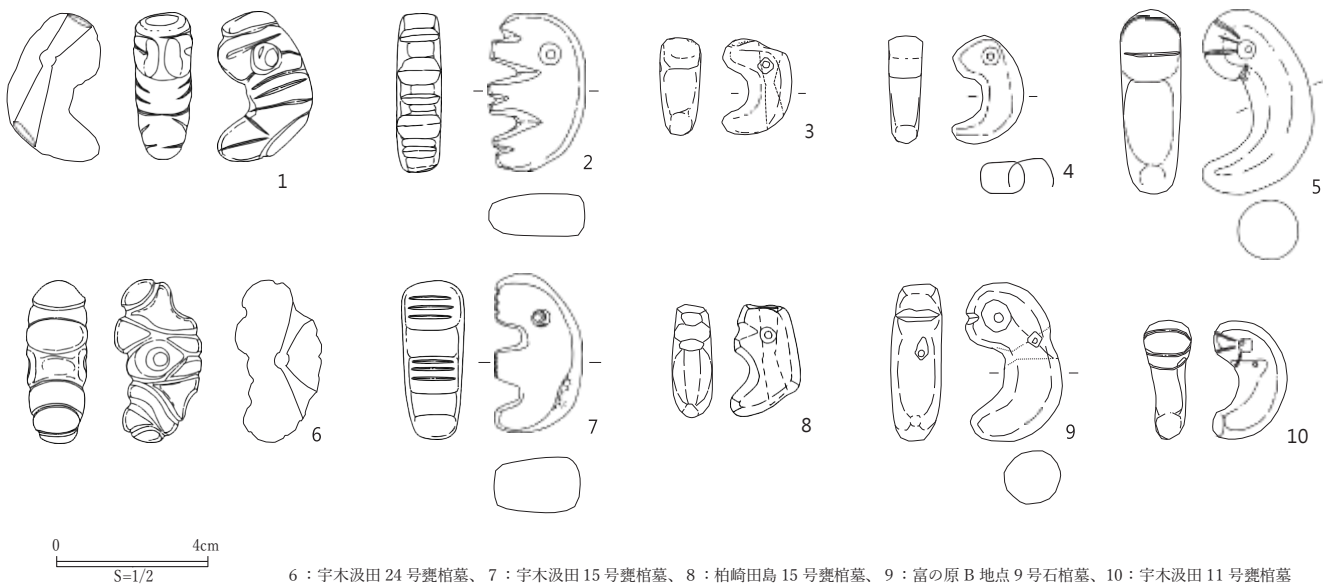
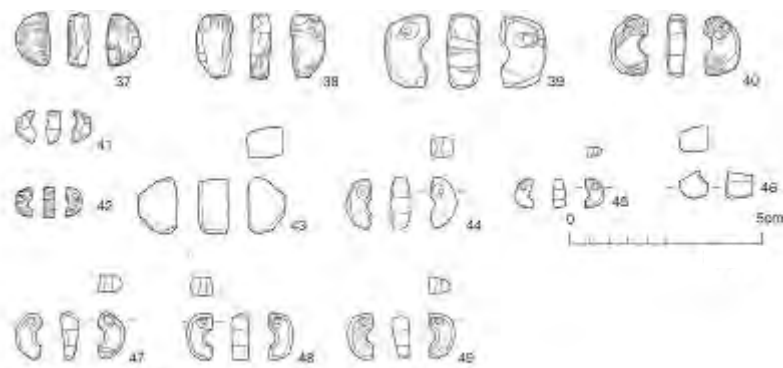


図5 吉武高木遺跡における副葬品の分布 (福岡市立歴史資料館 1986)



6 : 宇木汲田 24 号甕棺墓、7 : 宇木汲田 15 号甕棺墓、8 : 柏崎田島 15 号甕棺墓、9 : 富の原 B 地点 9 号石棺墓、10 : 宇木汲田 11 号甕棺墓
2・3・4 は発表者実測、1・5・10 は木下 2013 から再トレース、他は各報告書から再トレース

図6 吉武高木の翡翠製勾玉と「北部九州系」勾玉の代表例



第5図 生麻道跡の勾玉 (2) (37~42管輪、43~49下谷地)

図7 北陸の生産遺跡出土の翡翠製勾玉 (浅野 2003)

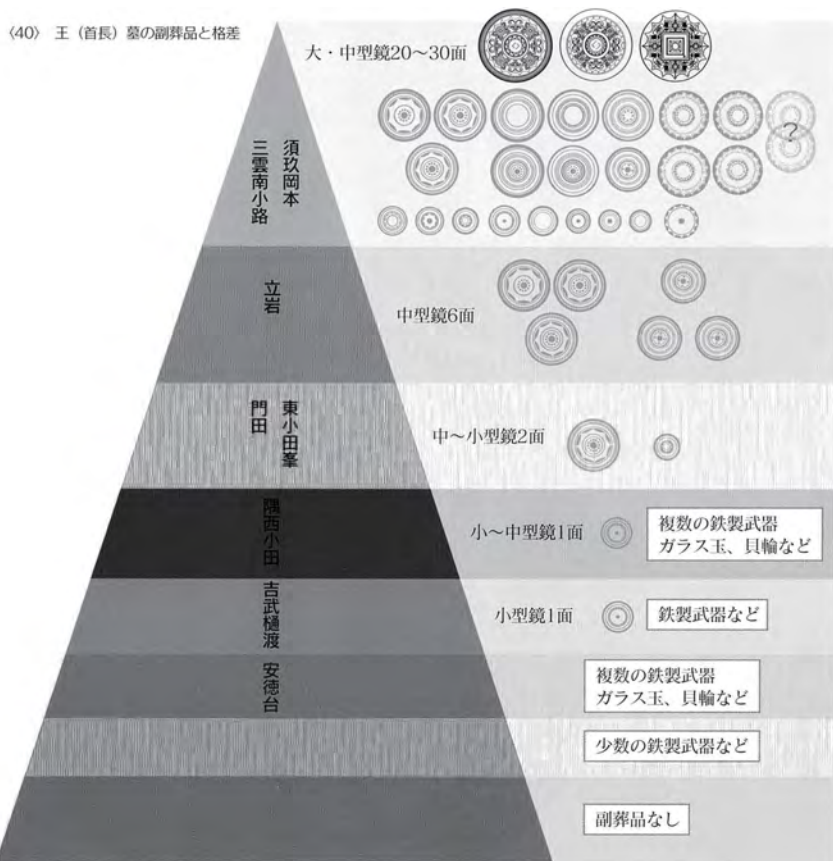


図8 弥生中期後葉の北部九州にみられる副葬品の格差

(福岡市博物館 2015)

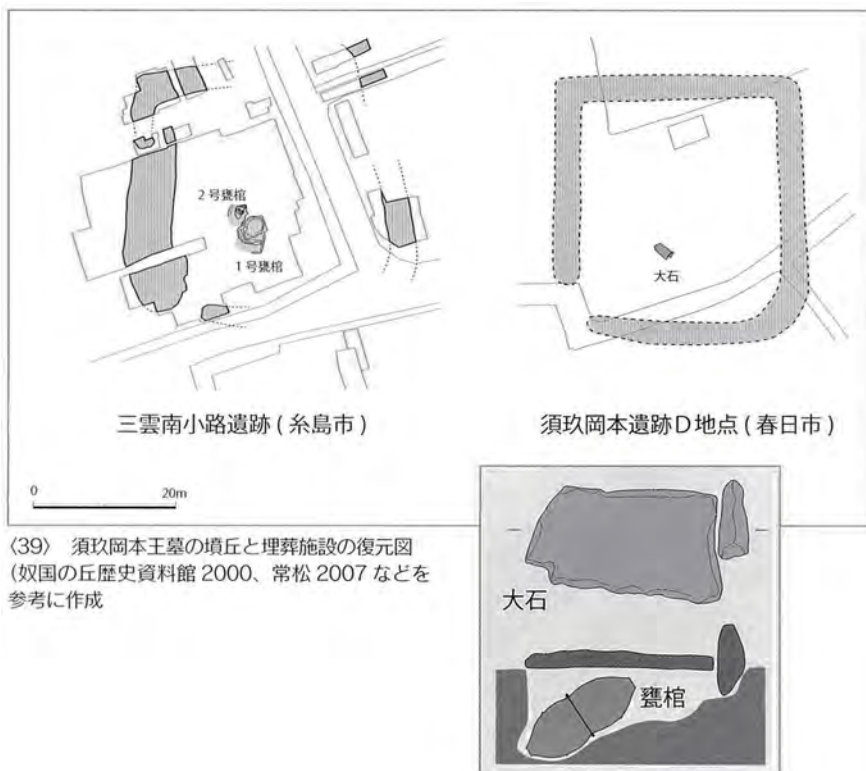
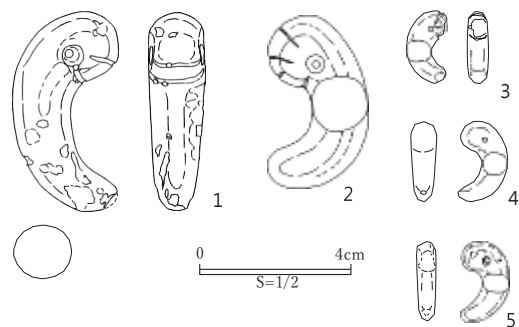


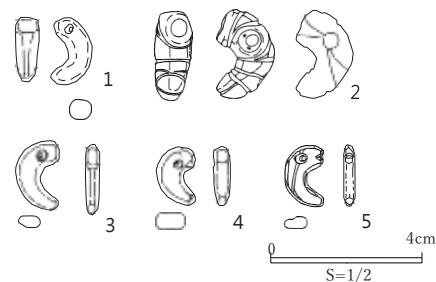
図11 三雲南小路遺跡と須玖岡本遺跡 D地点

(福岡市博物館 2015)



- 1: 須玖岡本 D 地点甕棺墓 (柳田 2008)
2: 三雲南小路1号甕棺墓 (福岡県教委 1985)
3・4: 三雲南小路2号甕棺墓 (福岡県教委 1985)
2は翡翠製、他はガラス製。

図9 須玖岡本 D 地点・三雲南小路遺跡の勾玉



- 1: 吹上4号甕棺墓、2: 吹上5号甕棺墓 (日田市教委 2006)
3~5: 安徳台2号甕棺墓 (柳田 2008)
1・2は翡翠製、3~5はガラス製。

図10 吹上遺跡・安徳台遺跡の勾玉

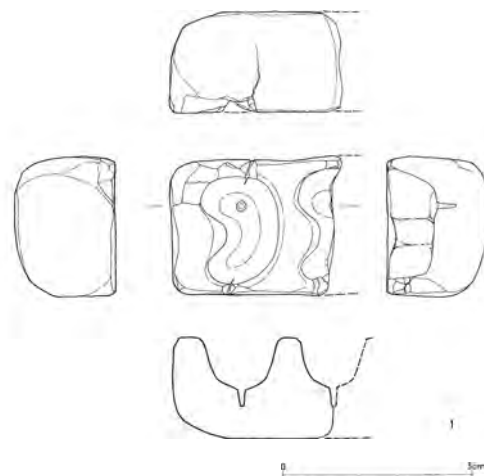
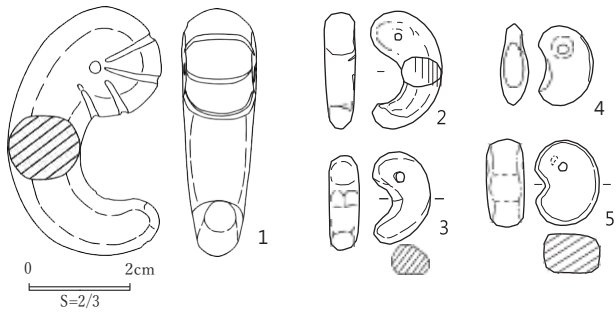


図12 須玖五反田遺跡出土の勾玉鋳型

(春日市教委 1994)



- 1：須玖岡本1地点20号甕棺墓（柳田2008）
- 2・3：松原1号墓（鳥取県文化財団2012）
- 4：大山5号墓第2主体（丹後町教委1983）
- 5：左坂24-1号墓第9主体（大宮町教委2001）

図13 弥生後期前半～中頃のガラス勾玉

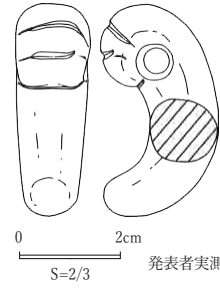


図14 楯築墳丘墓出土
翡翠製勾玉

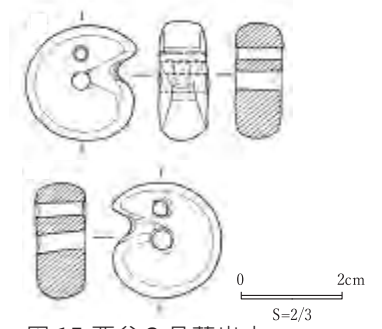


図15 西谷3号墓出土

ガラス製勾玉
(島根大考古学研究室1992)

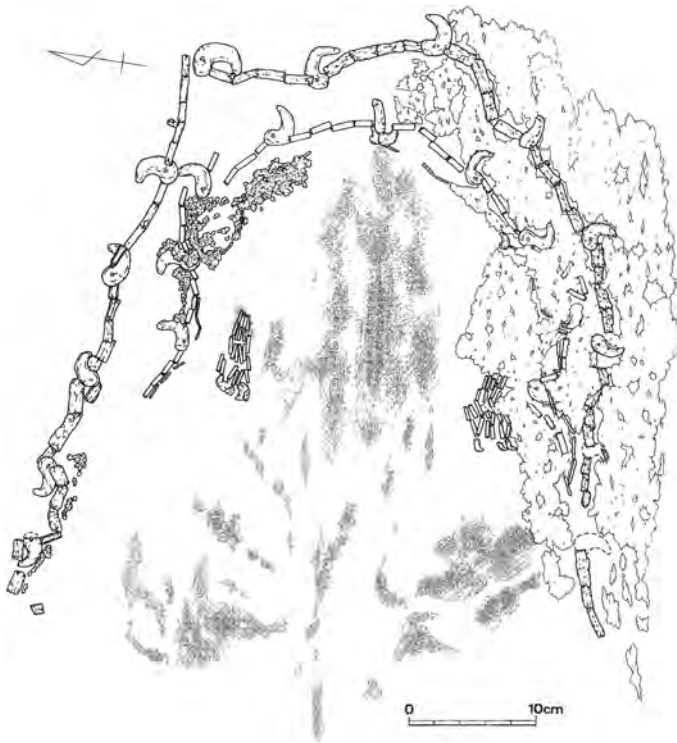


図16 赤坂今井墳丘墓第4主体 玉類出土状況
(峰山町教委2004)

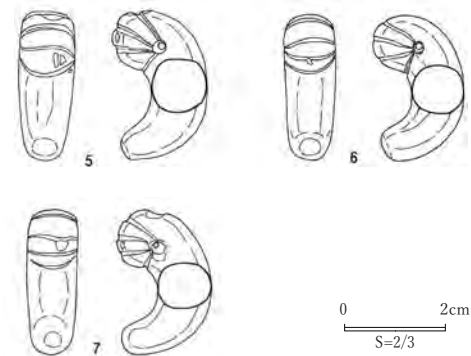
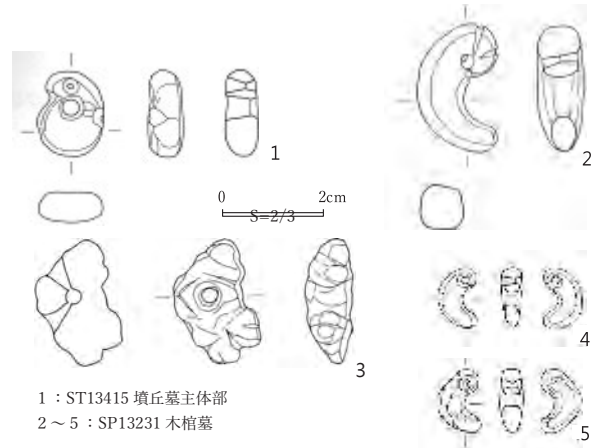
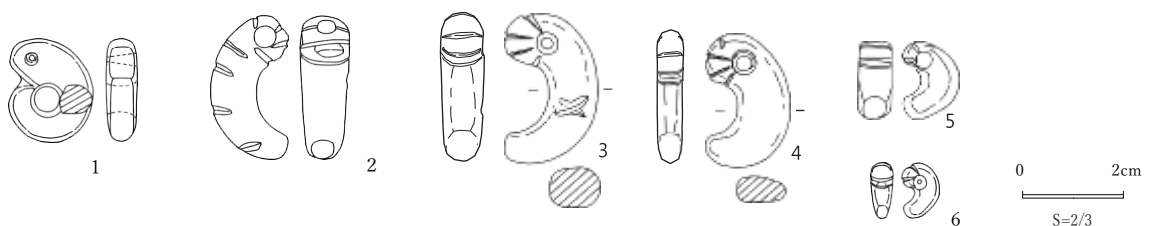


図17 平原1号墓出土 ガラス製勾玉
(柳田2008)



- 1：ST13415 墳丘墓主体部
- 2～5：SP13231 木棺墓

(佐賀県教委2012)



- 1：メスリ山古墳（樞考研1977）、2・5：下池山古墳（樞考研2008）、3：向野田古墳（発表者実測）、4：免ヶ平古墳第2主体（発表者実測）、6：免ヶ平古墳第1主体（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館1986）

図19 古墳時代前期の翡翠製勾玉

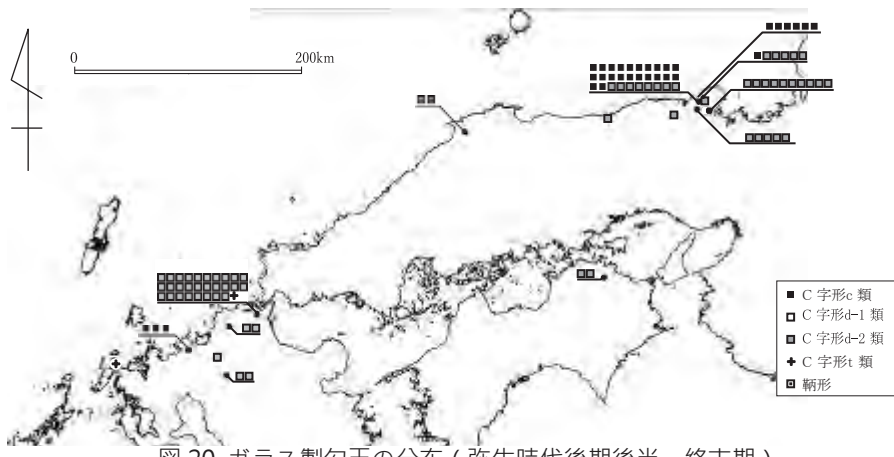


図20 ガラス製勾玉の分布 (弥生時代後期後半～終末期)

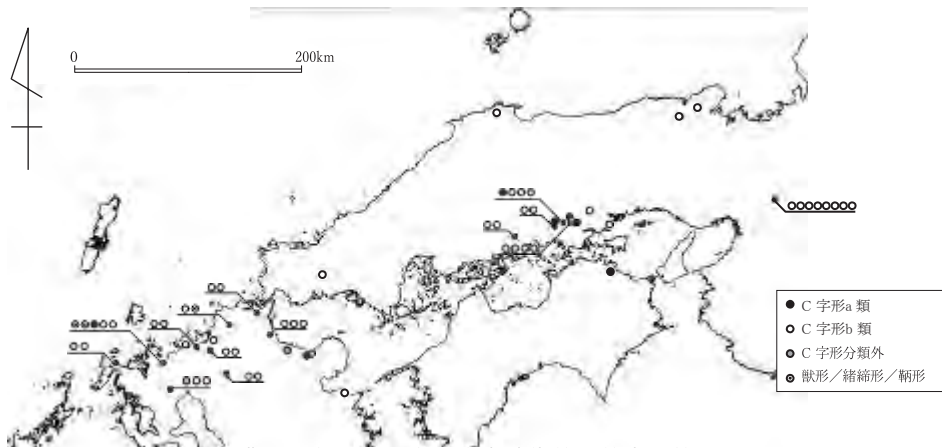


図21 翡翠製勾玉の分布 (弥生時代後期後半～終末期)

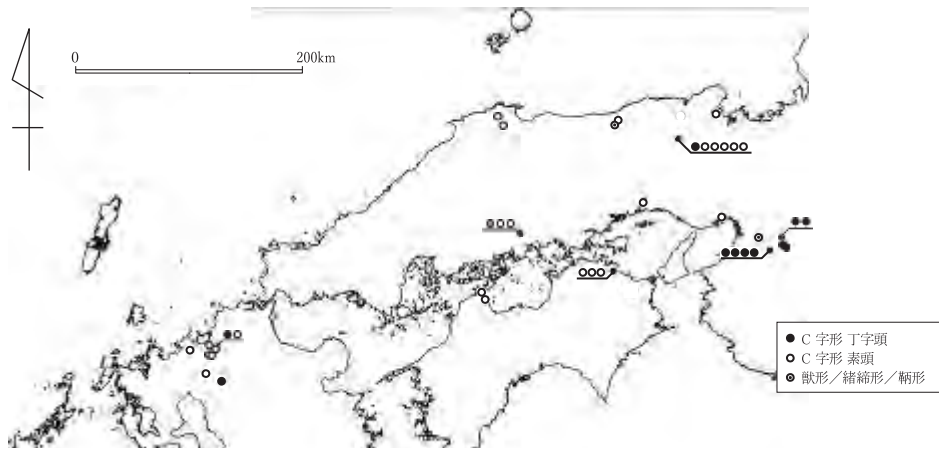


図22 翡翠製勾玉の分布 (古墳時代前期前半)

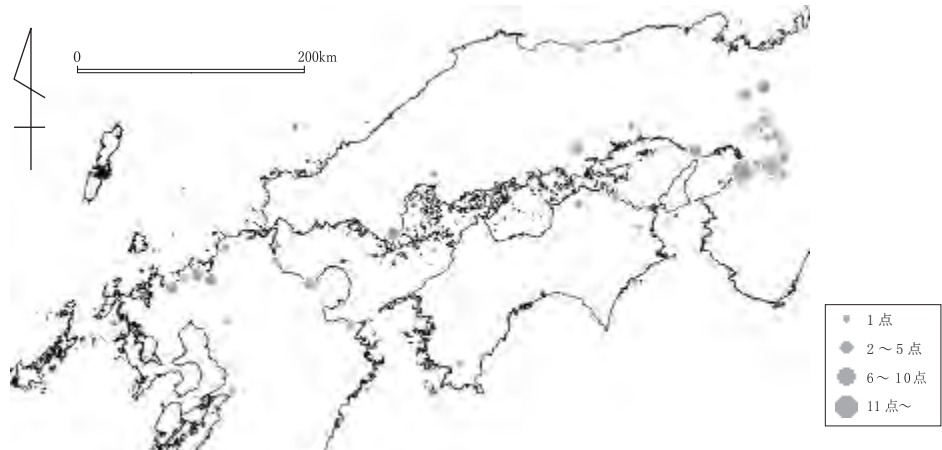


図23 翡翠製丁字頭勾玉の分布傾向 (古墳時代前期後半)